

「野分文庫」と「猪図蒔絵下絵」

平成24年(2012)秋、美術工芸資料館を訪ねて来られた老婦人が、一枚の写真を出して「浅井忠のつくったものだと聞いているが本物だろうか」と言われた。美術工芸資料館も登場したNHKの番組を見て、亡くなられたお父上が購入された手箱のことを思い出されたとのことだった。

それは、これまで研究者のあいだでも存在が知られていなかった「野分文庫」(図1)であった。美術工芸資料館が所蔵する「朝顔蒔絵手箱」(AN.1617)と同様に、浅井忠(1856-1907)が図案をつくり、杉林古香(1881-1913)が製作したものであり、なによりも当館が所蔵する浅井忠画「猪図蒔絵下絵」(図2、AN.3439)をもとに製作された「実物」であるという点で、非常に重要な作品である。

「野分文庫」は、縦27cm、横33.5cm、高さ11.5cm、蓋部分の最大立ち上がりは7.9cmで、全体に丸みを帯びた手箱である。



図1 野分文庫

身の底部には金泥で「黙語按」(黙語は浅井の画号)、「古香印」、銀泥で浅井のもうひとつの画号「木魚」の落款が記されている。

共箱は内箱と外箱からなり、内箱には、去風流の家元であり、浅井や古香と深い交流のあった華道家西川一草亭(1878-1938)による箱書があり、内箱の蓋の表には「野分文庫 黙語畫 古香作」と記され、蓋の裏には「一草亭」の署名と押印がある。また、落とし蓋形式の外箱には、「黙語圖按 古香蒔繪 野分文庫」と書かれており、さらに右側面には「水落」と書かれた紙が貼られていて、正岡子規

(1867-1902)に師事した大阪の俳人水落露石(1872-1919)、あるいはその親族の旧蔵品であった可能性を示している。

京都高等工芸学校の教授であった浅井忠と、明治33年(1900)、京都市立美術工芸学校描金科を卒業した後、一草亭やその実弟の津田青楓(1880-1978)らと小美術会を結成するなど、新しい漆芸の研究に取り組んでいた杉林古香が出会ったのは、明治37年頃のことであった。小美術会の活動を「大いに騒がなくちやいかぬ」と奨励した浅井は、その後古香らに「猪の文庫、布袋の圖案、其他四五枚の圖案」を提

供した。これがきっかけで、図案家と若手作家とが共同で研究をおこなう漆芸の研究団体、京漆園へと続く二人の共同製作がはじまる。

「野分文庫」がお披露目されたのは、明治39年9月に古香宅でひらかれた展示会であった。この時の模様を黒田天外が「…當日陳列の製作品中第一との衆

評ありし野猪の文匣がある。」と『京都日出新聞』で報じ、絶賛している。また、文芸雑誌『ホトトギス』第11巻第2号(明治40年12月)では一草亭が「野分文庫」を紹介し、同巻第3号に実物の写真(図3)を掲載している。このように、「野分文庫」は、製作当初から注目され、浅井のデザインした工芸品のなかでも高評価を受けた作品であった。

当時の資料で、実物の写真が掲載されているのはこの『ホトトギス』第11巻第3号だけであり、転載されたものを除き、以降この作品(以下、「初出野分文庫」とする)の画像が掲載された書籍は現時点で見つからない。

そこであらためてこの「初出野分文庫」の写真と今回見つかった新出の「野分文庫」を比べてみる。すると、両者のあいだには、若干の違いがあることが分かる。まず、一点目は、中央より右上の部分、桔梗の花と右側の猪の間に描かれている千草であるが、「初出野分文庫」では、左から流れている千草が一本、交差する千草と交わってそのままつきぬけている。しかし、今回発見された「新出野分文庫」では、交差する千草とぶつかってそこでまっまっている。二点目は、左下の桔梗の螺鈿部分の貝の貼り込み具合で、貼られている貝片のかたちが「初出野分文庫」と「新出野分文庫」では異なっている。この二点から、「初出野分文庫」と「新出野分文庫」とは、同一の作品ではなく、同じ図案をもとにした別の作品である可能性が出てきた。

それでは、なぜ同じ図案をもとにした作品が二点存在しているのだろうか。

佳品と園内で認定されたものに価格を決めて、販売していた京漆園では、その作品が売れた後も、同図案の製品を複数つくることがあったと思われる。当館が所蔵している「朝顔蒔絵手箱」は、身の底部に「黙語按」、「古香印」と落款があるため、浅井図案、古香製作の作品であることが分かっているが、浅井の図案には、「浅井君圖案 迎田君製作」と書かれていて、実物こそ残っていないものの、同じ図案から違う作家(古香と迎田秋悦)が製作していた可能性が想定できる。

このことから、「野分文庫」も古香宅での自作展や関西美術会第五回展に出品された後、売れるか焼失したか、なんらかのかたちで古香の手を離れ、その後、若干のデザインの変更を加えてあらたにこの「新出野分文庫」が作成されたと考えられる。そして、その注文主はやはり「新出野分文庫」の旧蔵者であったと思われる水落露石である可能性が高い。

「野分文庫」の発見は、浅井図案、古香製作の作品として製作当初からもっとも評価の高かった「野分文庫」の作品そのものを知ることができるようになった点で、非常に意義がある。それに加えて、「野分文庫」が複数つくられたことが確認できた点も大変重要である。優れた図案とその作品が周囲からの要望により再生産されるということが、その人間関係も含めて再構成できた。「新出野分文庫」は、明治時代後期の京都の工芸界の一側面を明確に浮かび上がらせる貴重な作品といえるだろう。

現在、この「新出野分文庫」は当館に寄託され、平成25年10月21日から11月30日まで当館開催の「浅井忠と「装飾」—武士山狩図

から図案まで」で展示されている。この機会にぜひ一度この貴重な文庫をご覧いただき、明治末期にはぐくまれた関西における文人たちの豊かな人間関係に想いをはせてほしい。

(美術工芸資料館 和田積希)



図2 猪図蒔絵下絵



図3 野分文庫(『ホトトギス』第11巻第3号より転載)